

ロシアによるウクライナ侵略を糾弾し、 ウクライナ市民との連帯を表明します

立命館大学国際平和ミュージアム

誰もが想定していなかった武力による主権侵害、領土侵略が、21世紀に入った今日も公然と行われるのを目の当たりにして、耳を疑い、言葉を失います。しかも、国連憲章の下、安全と平和の維持に責任を持つ、国際連合安全保障理事会の常任理事国自らによる侵略行為です。

プーチン大統領が述べる、「自国民保護」「現地からの介入要請」などの様々な理由もまた、20世紀初頭戦争が違法化される前によく聞いた言葉であり、今回の明確な国際法違反行為を正当化するために使われていることに驚きます。独立国であるウクライナへの侵略行為は、NATOの勢力拡大阻止が本当の理由だといわれています。私たちはNATOのロシア包囲網による軍事的緊張の高まりを望むものではありませんが、理由が何であれ核の使用すらちらつかせるプーチン大統領の姿勢は、法を何とも思わない言語道断な振る舞いといえるでしょう。

国連総会が策定した侵略の定義に明確に合致する今回の侵略は、ウクライナの人々の生命身体を脅かす最たる人権侵害であり、人間の安全保障を根底から否定する蛮行であることから、決して許すことができるものではありません。

世界各地で戦争反対の声が上がっています。すぐに弾圧されてはいるようですが、ロシア国内でも反対の声が上がっていることには、一縷の望みを見ることができます。戦争を拒否し、市民社会の力で平和を達成することを展示で示そうとしている立命館大学国際平和ミュージアムは、今回のロシアの侵略をきっぱりと糾弾し、反戦のために立ち上がっている人々と連帯し、速やかなロシア軍の引き上げと、戦争責任者の処罰、賠償の開始など法の支配への回帰を訴えます。